

市民と共創する

まち・まるごとリビングラボ

大磯町をフィールドに
Well-beingとモビリティ確保（MaaS）を軸として

大磯コンソ/JST・RISTEX Project チーム & Japa [窓口:芝原]

Copyright © 2024 Japan Association for Professionals' Activities. All Rights Reserved.

13

プログラム概要

■ 目的

- 大磯町をフィールドに、関係者と連携して、大磯地方創生事業推進コンソーシアム（略称：大磯コンソ）が取り組む社会課題/地域課題解決型事業の具体化・導入を促進することを通じて、地域全体のwell-beingの向上を図る。

※ well-being：肉体的、精神的に、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること（WHO）

■ プログラム

1. JST/RISTEX プロジェクトと連携した社会実装のためのリビングラボの展開
 - JST/RISTEXの公募事業「社会的孤立・孤独予防プログラム」の採択Projectと連携しつつ、民間企業等が大磯町の町民・団体の方々と共創しながら、具体的な仕組み・サービス・ツール開発を行う。常設の活動拠点として空き屋を活用したリビングラボ拠点を設置。
 - ※ リビングラボ：市民・企業・行政等の協働による社会課題解決や新しい価値の創造への取り組み。多様な人の参加のきっかけづくり
2. 包括MaaS(Mobility as a Service)の導入支援
 - 従来型の公共交通に代わる個のユーザに対する多様なオンデマンド型の新たな移動サービス（包括型MaaS）の導入に向けて、MaaSオペレータ事業体の創設をめざす。
3. 大磯コンソ倶楽部の運営
 - 大磯コンソ会員の各種事業サービスを利用者として支援する「大磯コンソ倶楽部」を設立する。その入会金・年会費を事業基金として、大磯コンソ事業（空き屋取得・活用等）を促進し、さらなるサービス拡大につなげる。

Copyright © 2024 Japan Association for Professionals' Activities. All Rights Reserved.

14

体制

■ JST/RISTEXの公募Project チーム

- 名称：サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる社会的孤立・孤独予防モデル [期間：2023年10月1日から2027年3月31日まで]
- 研究：名古屋大学（研究代表者）・東京大学・慶應義塾大学
- 協力：大磯町・星槎大学・インターネットITS協議会・大磯コンソ 他

■ 大磯コンソ [事務局：Japa]

- Well-being研究会 設置
 - ・ 町民、町内団体、企業、大学関係者、・・・ ※参加呼びかけ
 - ・ リビングラボ拠点：大磯コンソ個人会員が所有する空き屋活用
- 包括型MaaS研究会 設置 ※参加呼びかけ
 - ・ 町内でサービスしている送迎車両運行事業体（病院・学校・福祉等）
 - ・ 商工会、観光協会、大磯町（都市計画、福祉、産業観光）
 - ・ アプリ開発・管理事業者、その他関心事業者
 - ・ 町内で営業する既存交通事業者
- 大磯コンソ倶楽部 設置
 - ・ 大磯コンソの研究会・会員の事業の拡大・利用を目的とする応援団（企業等） ※募集

補：JST/RISTEX 公募の概念実証(Projectチーム)と実装支援(大磯コンソ)に向けて

■ 公募Project名称

- サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる社会的孤立・孤独予防モデル

■ ビジョン

- 人々が帰属（つながる）するコミュニティがゆるやかに増加していく社会の構築

■ ミッション

- 社会的孤立・孤独との関係メカニズムの理解 → リスクの可視化と評価手法
+ こうした関係性を生む「まち空間」との関係の理解 [by 大磯コンソ]

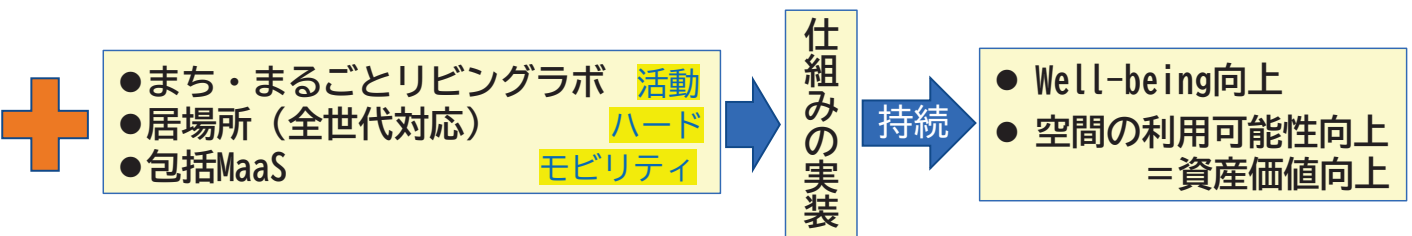
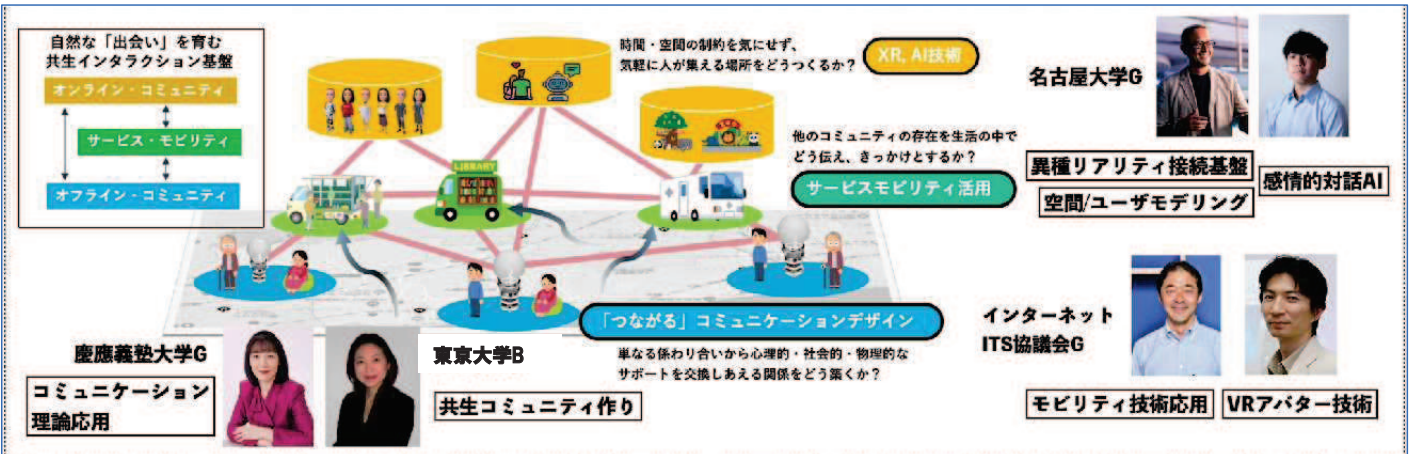
- 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みの構築 → 概念実証
 - ・ サービス・モビリティを通じたコミュニティ接続機能の実現
 - ・ 実コミュニティと仮想コミュニティの連携プラットフォームの構築
+ 多様な観点からのアプローチ（社会システムズアプローチ） [by 大磯コンソ]

➔ 研究開発Project後の実装化・持続化に向けての道筋づくり [by 大磯コンソ]

- 包摂性を含む多様性（オールステージ）対応のリバースイノベーション

➔ Well-beingなまちづくり

補:社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みの構築(概念実証)と仕組みの実装への道筋づくり

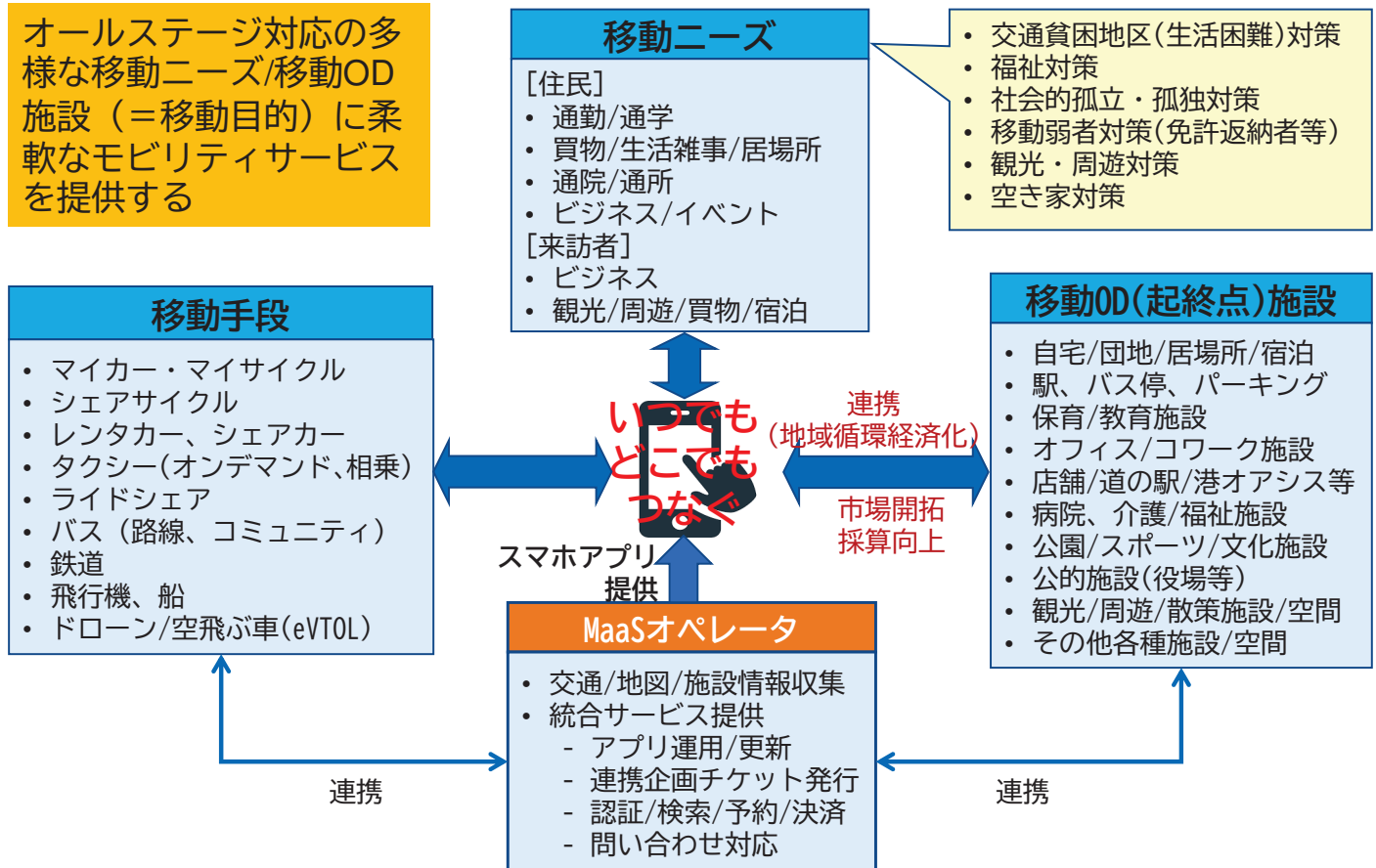


MaaSの意義 ～新たな時代対応のモビリティ確保～

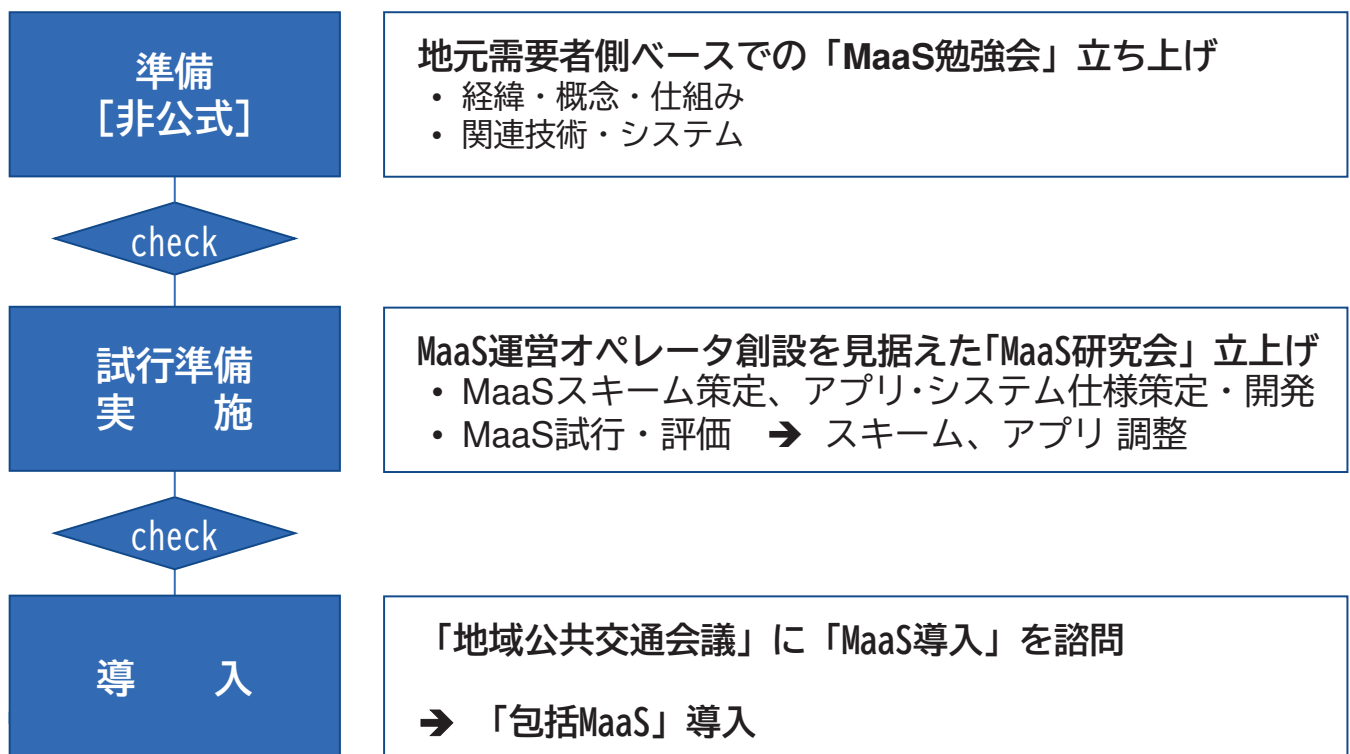
- 従来型(通勤・通学ピーク時/路線対応)公共交通の維持の限界: **供給側主導**
 - 人口減少・マイカー普及 → 少量(タクシー)、中量(バス)・大量(鉄道)交通の需要減少
 - 運転手不足 → (ライドシェア対応のみでは限界) → 輸送サービス能力の低下
 - 単一目的輸送手段の可能性: **病院送迎バス、福祉施設送迎バス、スクールバス**
 - オフピーク時に車両が眠っている → 車両・ドライバー等のシェア化
 - 新たな(オンデマンド・スポット/個対応)移動の必要性の拡大: **需要側主導**
 - 交通貧困地区拡大・高齢者/免許返納者の増加
 - 生活難民(買物、通院・通所、生活雑事、居場所)の増加
 - 社会的孤立・孤独対策(居場所等の選択肢の拡大)としてのMobilityの包摂性の必要性の増加
 - ※包摂: 弱い立場の人々を積極的に社会的に受け入れること
 - 来訪者の多様化: 観光・周遊・セラピー・テレワーカー等の増加 → ウォークアブル支援
 - まち全体の分散NW型宿泊・体験・店舗(飲食・物販)、コ・ワーク・研修施設 等への移動
- **包括MaaS (Mobility as a Service) のシフト・導入**
- 乗合ワゴンタクシー/マイクロバスによる全域オンデマンド・貨客混載型モビリティサービス
 - well-being なまちづくりのモビリティインフラ
 - まち全体の空間・施設(含む空き屋)の利用価値の向上 → 資産価値向上

包括MaaSの構成 ～地域の実情に応じて最適化～

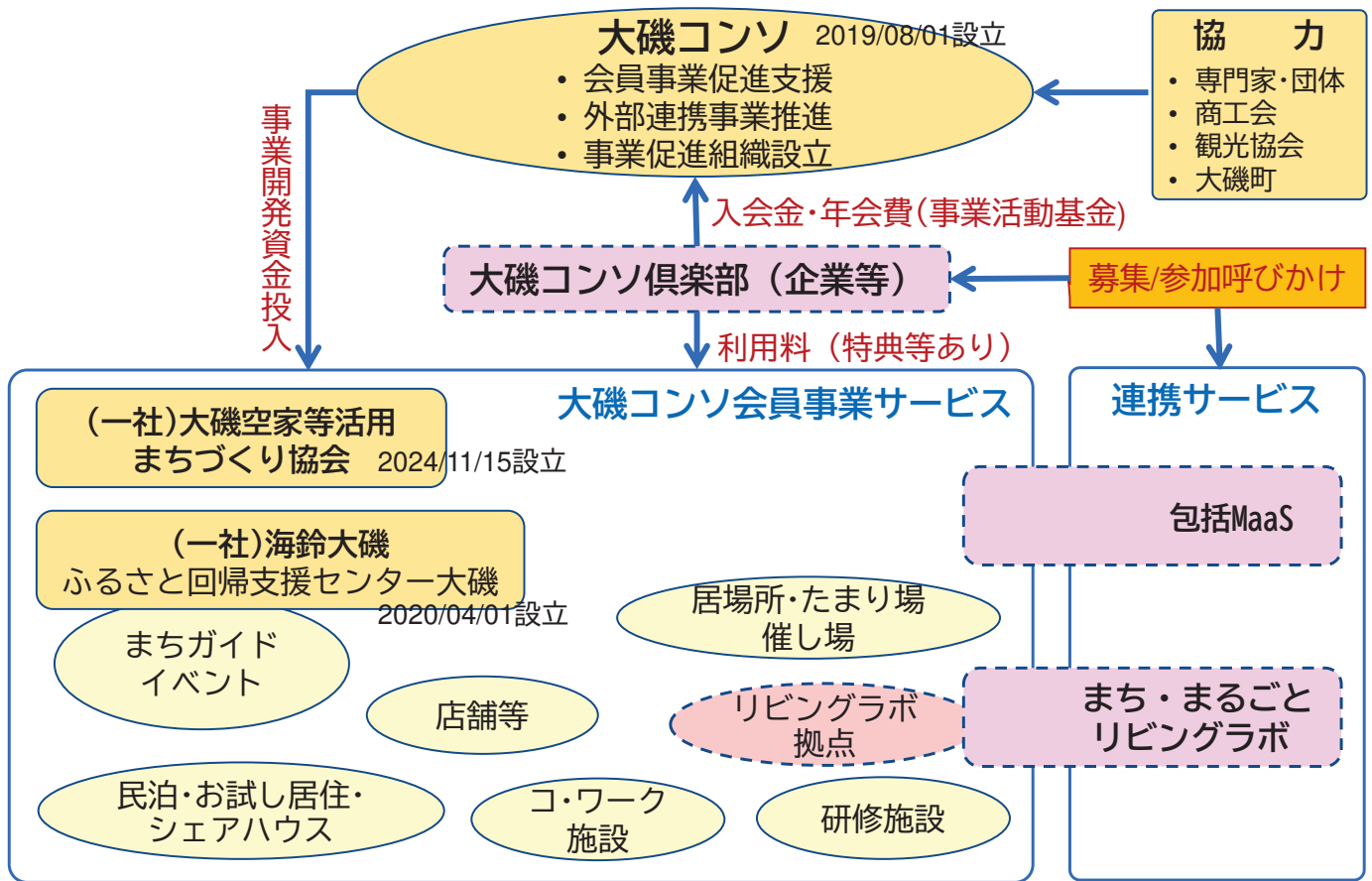
オールステージ対応の多様な移動ニーズ/移動OD施設 (=移動目的) に柔軟なモビリティサービスを提供する



補: 検討プロセス



補：大磯コンソ倶楽部





Japa日本専門家活動協会
2024年12月12日(木)

JST RISTEX AmPlatea

市民と共創するまち・まるごとリビングラボプログラム

健康を守る地域のつながる力
—孤立・孤独による社会課題への挑戦—

細田 満和子 PhD(社会学)

星槎大学/東京大学医科学研究所



サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる 孤立・孤独予防モデル構築プロジェクト

AmPlatea プロジェクト

Amplificatus (拡張する・増強する) + Platea (広場・コミュニティ)
Am (ラテン語で「愛」を表す prefix)

米澤 拓郎

名古屋大学大学院工学研究科 准教授 (代表提案者)

細田 満和子

東京大学大学院 医学系研究科 特任研究員 / 星槎大学 共生科学部 教授

中澤 仁

慶應義塾大学 環境情報学部 教授

研究協力機関

木村 聡

インターネットITS協議会

芝原 靖典

大磯地方創生事業推進コンソーシアム

他



JST RISTEX

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

研究実施体制: 情報×人×社会×モビリティ×地域等の専門家・実務家チーム

研究実施機関

名古屋大学G (研究代表)



米澤拓郎

ヒューマンコンピュータ
インタラクション



浦野健太

データサイエンス



片山晋

対話AI

東京大学+星槎大学G



細田満和子

社会学



堀越由紀子

社会福祉学

慶應義塾大学G



中澤仁

分散システム



杉本なおみ

コミュニケーション学



大越匡

Wellbeing計算機科学

協力機関

インターネットITS協議会G



木村聡

モビリティ・ITS技術
(日本電気)



鎌田卓

VR/MR/AR技術
(SpiralMind)



斎川一英

運輸・決済システム
(ヤマトシステム開発)

大磯コンソーシアムG



芝原靖典

社会システム・制度設計



古井昇空

僧侶・寺務
(宗教法人 東光院)



大久保浩正

シニアライフ
カウンセラー

- 神奈川県大磯町
- 地域IoTと情報力コンソーシアム
- 健康情報コンソーシアム
- など



サービス・モビリティ
(近づいてくる+人が集まる)



対面のコミュニティ



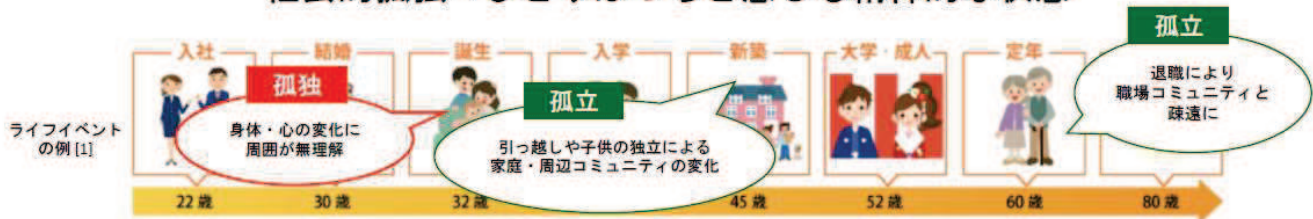
オンラインのコミュニティ



新しいコミュニティ、居場所が自然と広がっていく社会モデル

社会的孤立・孤独を防ぐために：本研究提案における考え方

社会的孤立 = 社会（コミュニティ）とのつながりのない/少ない状態
社会的孤独 = ひとりぼっちと感じる精神的な状態



想定以上の環境変化 + 想像すらしていなかった環境変化



新しいコミュニティへの出会いを
継続して支援することが必要

[1] <https://jp.pioneer/ja/corp/group/pioneerwelfareservice/mainbusiness/welfare/>

本研究で目指す社会像

👁️ ビジョン

人々が帰属するコミュニティがゆるやかに増加していく社会の構築

「多様なつながりを絶えず増やしていくことが、個人の人生や地域のレジリエンス向上に必要な」という意識を住民、企業、行政、専門家、支援団体など全員が共有し、それを支援することで、地域全体に社会的孤独・孤立の0次、1次予防的機能を内包する

→ Well-beingであることに満足せず、Well-becomingへと意識を変える

🚀 ミッション

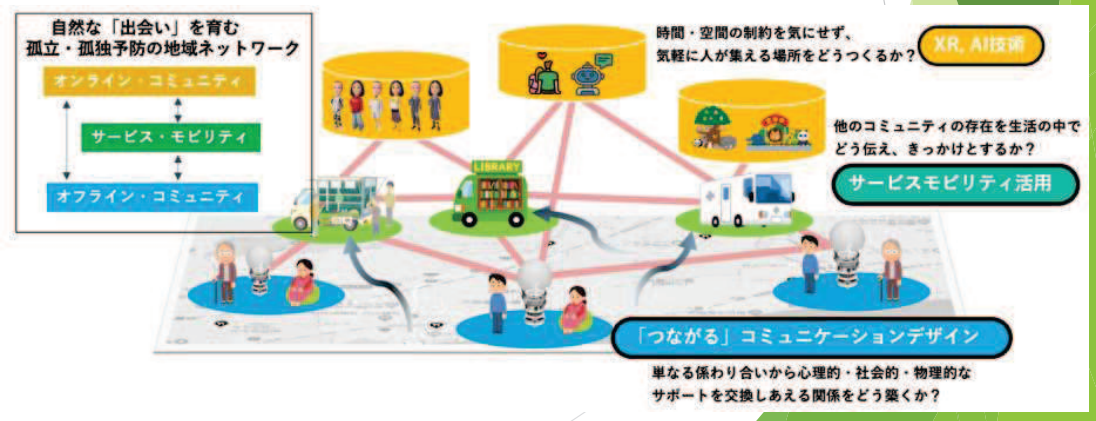
- 個々人の興味・思考・行動の枠と社会的孤立・孤独との関係メカニズムの理解
- サービス・モビリティを通じたコミュニティ接続機能の実現
- 実コミュニティと仮想コミュニティの連携プラットフォームの構築

学の取り組み=AmPlateaプロジェクト

ミッション(1) 孤立・孤独メカニズムの新たな理解



ミッション(2) 孤立・孤独予防モデルの構築



AmPlateaプロジェクト

Amplificatus (拡張する・増強する) + Platea (広場・コミュニティ)
Am (ラテン語で「愛」を表すprefix)

社会的孤独・孤立の新たなリスク因子の特定と

- ▶ 興味・行動の固定化への自覚を促し、異なる興味への誘導
- ▶ 多形態のコミュニティの場作りと、その存在の効果的な周知

サービス・モビリティを通じた他コミュニティの導線化を 実現

- ▶ 神奈川県大磯町を実証フィールドとした実験
- ▶ 物理(東光院等)と仮想(メタバース等)コミュニティの構築
- ▶ 複数のサービス・モビリティ(移動健康診断バス等)の活用

学際的な専門家チームと、企業、行政との密接な連携による 社会実装

社会的孤独・孤立の予防機能を備えた「つながる」社会へ



実証フィールド：大磯町



環境・人の多様性と、 一般性（人口規模）

(1)環境の多様性

東西8Km、南北4Kmのコンパクトな土地空間の中に、山場-農場-まち場-海場という日本の国土・地域構造及びその地域特性を反映した生活様式・価値観が凝縮された形で存在。人口は全国自治体の中央値に近い(1004番目/1718)。



- 社会的孤立・孤独を防ぐオフラインコミュニティの多様な形態や、それに付随するオンラインコミュニティ、およびそれらをつなぐサービスモビリティに関して、様々な可能性のもとで検討・取り組みを行うことが可能
- 全国の多様な各地に展開可能な環境条件が織り込まれている

(2)人の多様性

総人口減少・高齢化の流れにはあるが、都心への通勤可能な東京圏外縁部の豊かな自然や歴史・文化に恵まれた地域と云うこともあり、最近では、子育て世代（30～40歳代）を中心に社会人口増。従来住民と新規住民という意識・価値感の異なる層が混じりあった特異性を有する。



- 多様性とインクルーシブな社会を目指す今後の日本において、そのさきがけの環境条件が織り込まれている

先行モデル実証自治体としての適正

世界的課題となっている孤立・孤独

イギリス

- ▶ 65歳以上の4割に当たる約390万人が「テレビが一番の友だち」と答えた（2014年の調査）
- ▶ 成人の2割に相当する900万人以上が恒常的に孤独を感じている（2016年の英国赤十字などの調査）
- ▶ 「孤独」がもたらす医療コストは、10年間で1人当たり推計6000ポンド（約100万円）である。（2017年にロンドン大経済政治学院（LSE）が発表した研究）
- ▶ 孤独が原因の体調不良による欠勤や生産性の低下などで雇用主は年25億ポンド（約4200億円）の損失を受けると推計。
- ▶ 孤独について国を挙げて取り組む社会問題と認識。2018年に当時首相であったメイ氏は世界で初めて「孤独担当大臣」を任命した。孤独対策費は2000万ポンド（約3億3000万円）を計上。

アメリカ

- ▶ 社会的なつながりが希薄な状態が恒常化すると、不安症や鬱になりやすい。心疾患のリスクは29%、脳梗塞のリスクは32%、認知症のリスクが50%上がる。
- ▶ 高齢者の12年追跡調査で、孤独を訴えた人達はそうでない高齢者と比べ認知機能の低下が20%早かった。
- ▶ 孤独や孤立により早死にするリスクはそれぞれ26%、29%上昇。1日15本の喫煙に伴う早死にリスクに匹敵。

孤立と孤独

▶ 社会的孤立

「社会的なつながりや役割が乏しく、社会参加や交流が希薄な状態」
客観的概念で「社会とのつながりのない/少ない状態」

▶ 孤独

「孤立を自覚したり、個人が望む状態と現状の間に満たされていない
ニーズがあったりすることで生じる内面的な状態」
主観的概念で「ひとりぼっちと感じる精神的な状態」

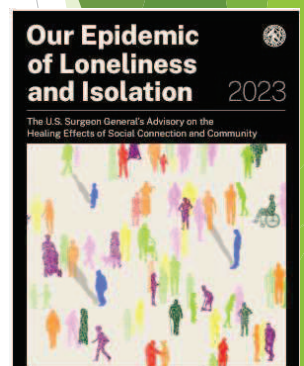
孤立・孤独による健康への負の影響

「**孤独と孤立という私達のエピソード** (Our epidemic of Loneliness and Isolation)」というテーマの勧告 (2023年)。

副題は「**社会的つながりとコミュニティがもたらす癒しの効果** Healing Effects of Social Connection and Community」

孤独や孤立が個人の健康に与える影響と、社会に与える影響を様々なデータをもとに説明した上で、政府や国民が考えるべき対策を含む内容。

「孤独は、単なる気持ちの問題ではありません。個人だけでなく、社会の健康を害するもの。お互いを思いやる社会を再構築しなければ、私たちの社会にはいま以上に怒りの感情や病気、孤立が蔓延してしまう」(2023年ビベック・マーシー アメリカ公衆衛生総監 Surgeon General)



孤独とは言えない

- ▶ 恒常的に孤独や孤立を感じている人でも、それが問題だと認識している人は2割以下にとどまる。孤独や孤立は、無意識のうち多くの人の健康を蝕む公衆衛生上の大きな問題。
 - ▶ マーシー総監が孤独や心の健康に注目する理由は、人々の意見を聞くために全米を回った際に、驚くほど多くの人が孤独や孤立に直面していると実感したから。
 - ▶ **ほとんどの人は「孤独だ」とは言わない。**そのかわりに「すべてを自分ひとりで背負わなきゃいけない気がしてつらい」、「自分があす消えてしまっても、世の中は何も変わらない」、「誰も自分のことなど気にかけていない」といった心情を吐露するという。
- (2023年ビベック・マーシー アメリカ公衆衛生総監Surgeon General)

孤独な日本人

- ▶ 「家族以外の人」との交流がない人の割合で、日本は米国の5倍、英国の3倍高いとされている。(2005年の経済協力開発機構OECDの調査より)
- ▶ 「家族以外に相談あるいは世話をし合う親しい友人が誰もいない」と回答した人が25.9%と、4人に1人以上という結果が出ている。(2015年の内閣府の60歳以上を対象にした調査より)

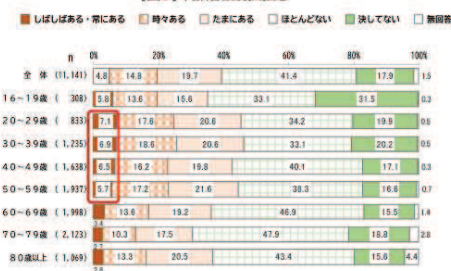
孤独の状況 (年齢階級別、男女別の孤独感、孤独感の継続期間)

- 孤独感を年齢階級別にみると、孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の割合は、20歳代から50歳代で高い(図3)
- 男女別にみると、男性が5.3%、女性が4.2%

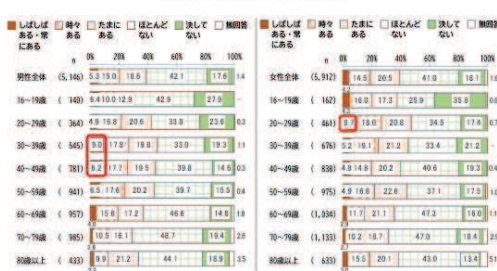
男女・年齢階級別にみると、男性では30歳代及び40歳代、女性では20歳代が高い(図4)

孤独・孤立の実態把握に関する
全国調査 (令和5年) 内閣官房
孤独・孤立対策担当室

【図3】年齢階級別孤独感

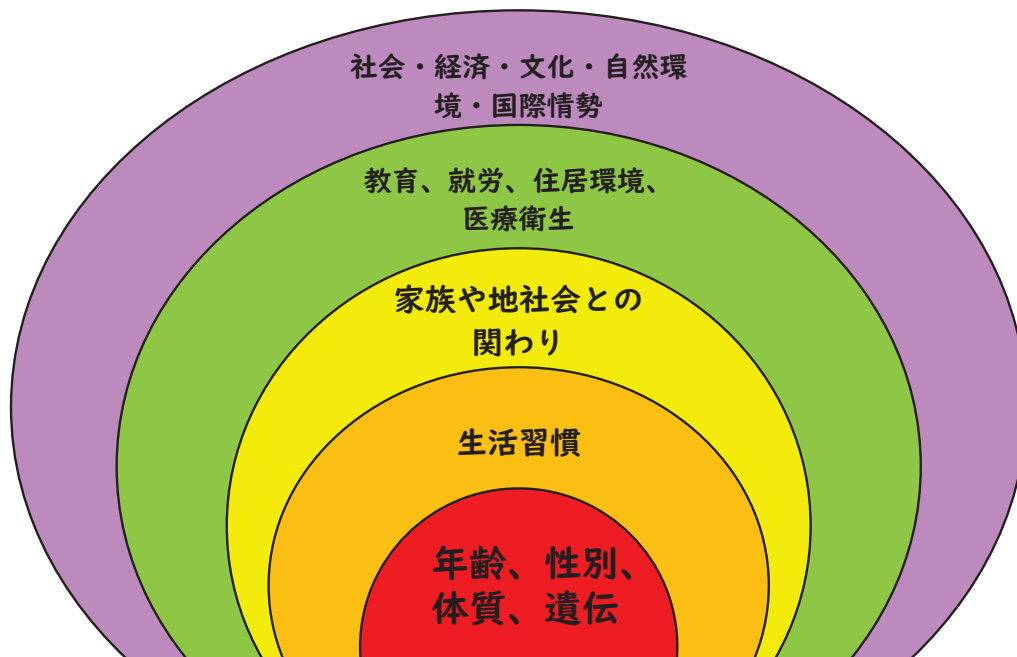


【図4】男女・年齢階級別孤独感



孤独・孤立の社会的背景

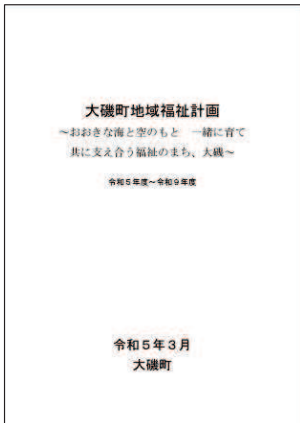
- ▶ 都市化による地域紐帯(ちゅうたい)の希薄化
- ▶ 核家族化
- ▶ 少子高齢化
- ▶ 単身世帯や単身高齢者世帯の増加
- ▶ 従来の終身雇用から非正規雇用の増加といった日本型雇用慣行の変化など



健康の社会的決定要因

ダーグレンの健康のレインボーモデル (Dahlgren and Whitehead 1991) を改訂

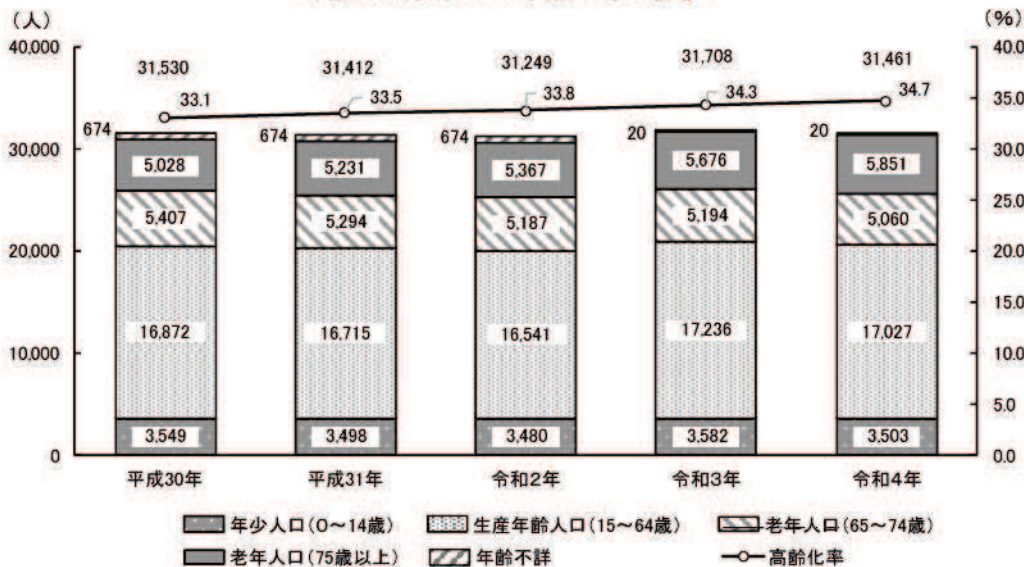
大磯町地域福祉計画 ～お おきな海と空のもと一緒に 育て共に支え合う福祉 のまち、大磯～ 令和5年度～令和9年度



No.	区分	委員	団体名	備考
1	学識経験者	細田 満和子	国際学園星槎大学	委員長
2	民生委員児童委員	鈴木 孝善	大磯町民生委員児童委員協議会	令和4年12月8日まで 令和4年12月9日から
		織戸 明		
3	民生委員児童委員	佐野 千代子	大磯町民生委員児童委員協議会	
4	区長連絡協議会	小泉 隆史	大磯町区長連絡協議会	
5	社会福祉協議会	竹内 京三	(社福)大磯町社会福祉協議会	令和5年1月31日まで 令和5年2月1日から
		鈴木 豊男子		
6	障がい者福祉施設	萩原 勝己	(社福)素心会	副委員長
7	高齢者福祉施設	山田 政雄	(社福)豊友会特別養護老人ホーム 大磯喜楽園	
8	児童福祉施設	山田 和信	(社福)エリザベス・サンダース・ホーム	
9	関係行政機関	富岡 順子	神奈川県平塚保健福祉事務所	
10	高齢者支援機関	坂本 佳織	大磯町地域包括支援センター	
11	公衆町民	渡邊 一彦	公衆委員	
12	医師会	木内 忍	(一社)中郡医師会大磯班	
13	関係各課(町職員)	熊澤 香織	町子育て支援課	
14	関係各課(町職員)	小川 真木野	町スポーツ健康課	
15	関係各課(町職員)	長岡 千明	町学校教育課	

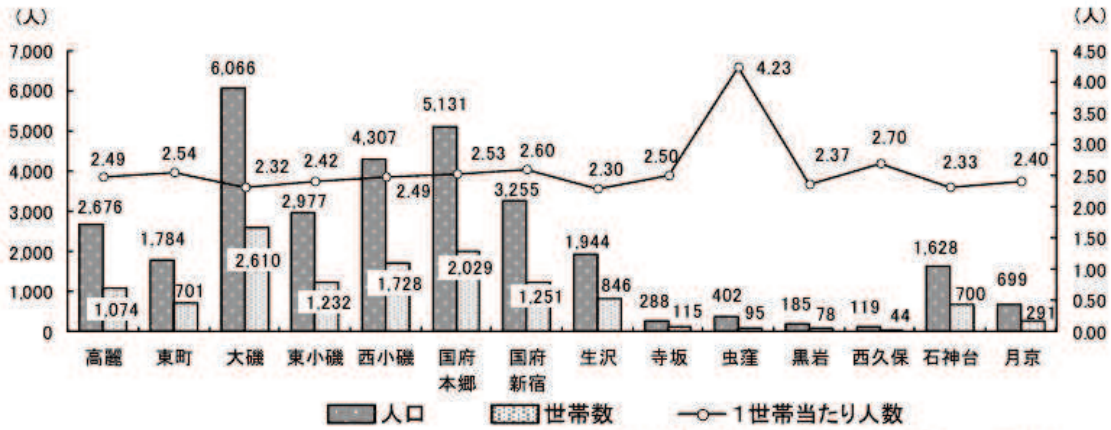
大磯町の人口

年齢4区分別人口と高齢化率の推移



資料：町統計資料（各年1月1日現在）

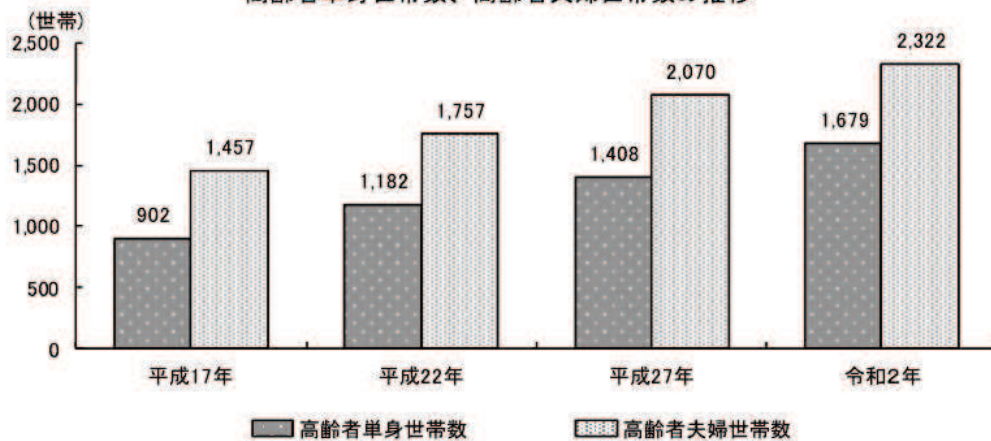
地区別の世帯数、人口



資料：町統計資料（令和4年1月1日現在）

高齢者世帯は、年々増加しており、高齢者単身世帯数は平成17年から777世帯増加し、令和2年で1,679世帯となっています。また、高齢者夫婦世帯数は865世帯増加し、2,322世帯となっています。

高齢者単身世帯数、高齢者夫婦世帯数の推移



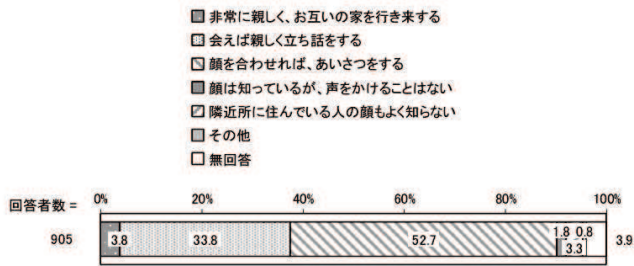
資料：国勢調査

- 住民を対象の「大磯町地域福祉に関するアンケート調査」
- ・調査対象 20歳以上の大磯町民2,000人を無作為抽出
 - ・調査方法 郵送による配布・回収
 - ・調査期間 令和4年2月3日から令和4年2月18日まで
 - ・回収結果 有効回答数:905件 有効回答率:45.3%

(3) 地域との関わり合いについて

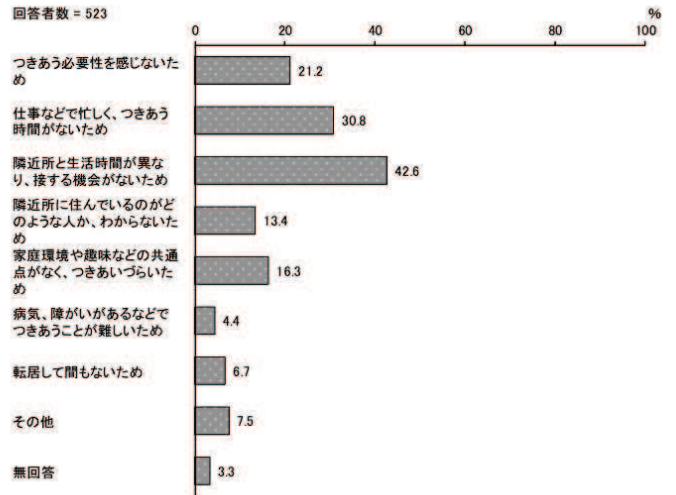
① ふだんの近所の人との付き合い

「顔を合わせれば、あいさつをする」の割合が52.7%と最も高く、次いで「会えば親しく立ち話をする」の割合が33.8%となっています。



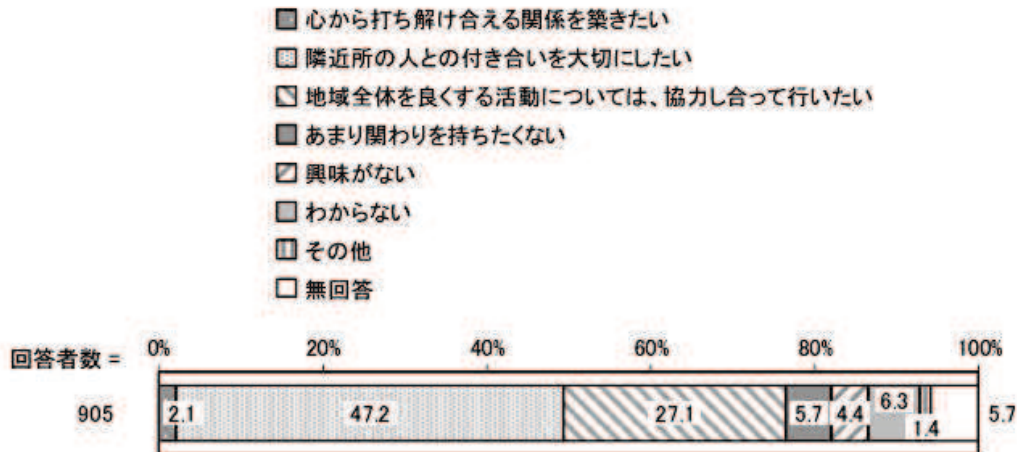
② 近所づきあいがあまりない理由

「隣近所と生活時間が異なり、接する機会がないため」の割合が42.6%と最も高く、次いで「仕事などで忙しく、つきあう時間がないため」の割合が30.8%、「つきあう必要性を感じないため」の割合が21.2%となっています。



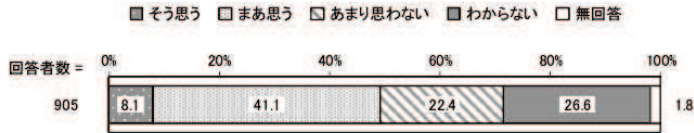
③ 今後の近所との関わり

「隣近所の人との付き合いを大切にしたい」の割合が47.2%と最も高く、次いで「地域全体を良くする活動については、協力し合っていきたい」の割合が27.1%となっています。



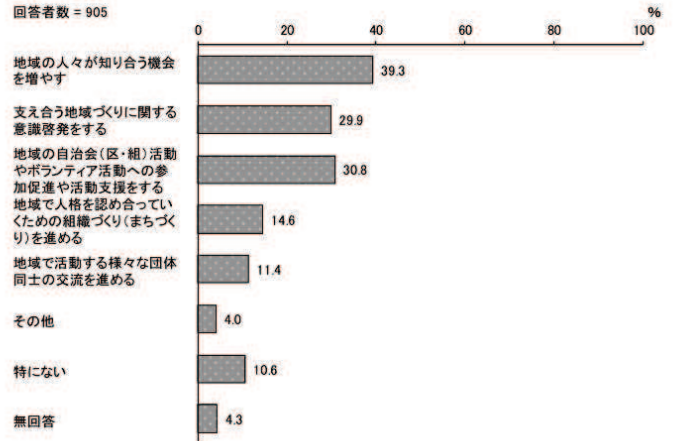
⑧ 住んでいる地域は、支援が必要な人にとって、安心して生活できる環境だと思うか

「まあ思う」の割合が41.1%と最も高く、次いで「わからない」の割合が26.6%、「あまり思わない」の割合が22.4%となっています。



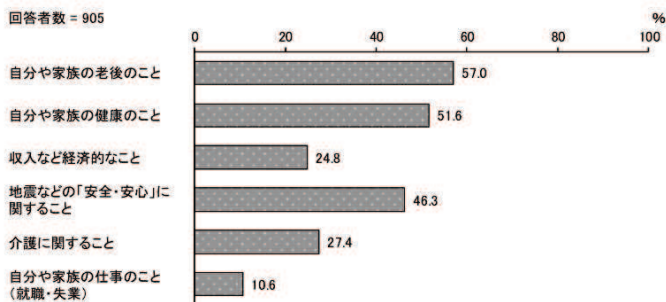
⑩ 住民同士が共に支え合う地域づくりを進めるために必要な大磯町の支援

「地域の人々が知り合う機会を増やす」の割合が39.3%と最も高く、次いで「地域の自治会(区・組)活動やボランティア活動への参加促進や活動支援をする」の割合が30.8%、「支え合う地域づくりに関する意識啓発をする」の割合が29.9%となっています。



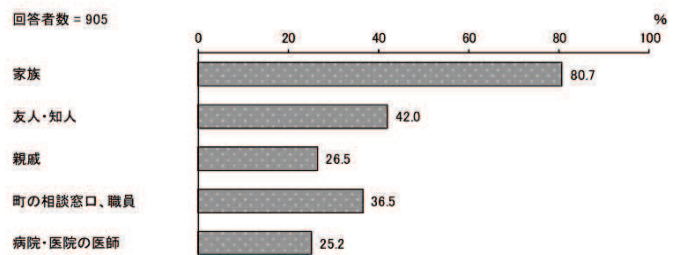
① 日頃の暮らしの中での悩みや不安

「自分や家族の老後のこと」の割合が57.0%と最も高く、次いで「自分や家族の健康のこと」の割合が51.6%、「地震などの「安全・安心」に関すること」の割合が46.3%となっています。



② 毎日の暮らしの中で相談や助けが必要なときの相談相手

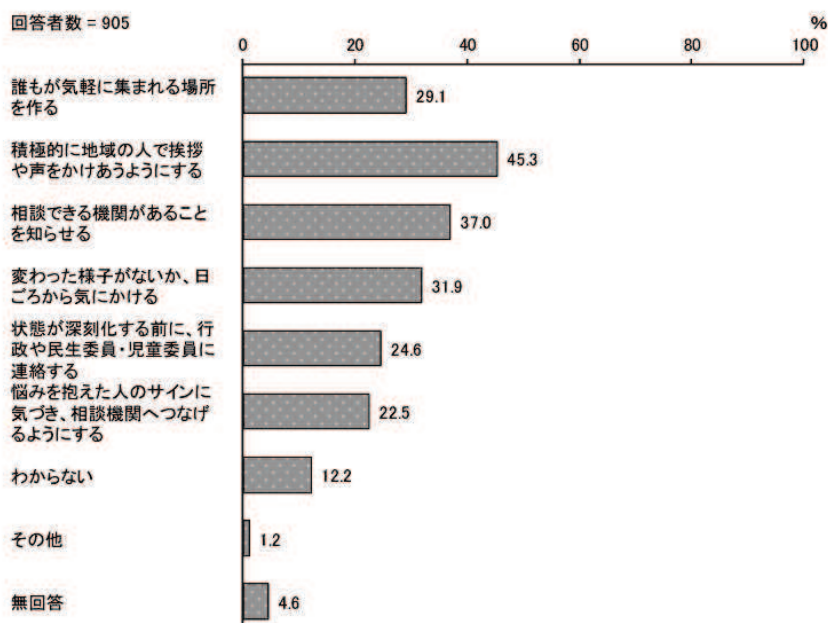
「家族」の割合が80.7%と最も高く、次いで「友人・知人」の割合が42.0%、「町の相談窓口、職員」の割合が36.5%となっています。



① 地域住民の一員として社会的孤立の課題に対してできること

「積極的に地域の人で挨拶や声をかけあうようにする」の割合が45.3%と最も高く、次いで「相談できる機関があることを知らせる」の割合が37.0%、「変わった様子がないか、日ごろから気にかける」の割合が31.9%となっています。

回答者数 = 905



【基本理念】

誰もが自立した生活が送れ、ともに支え合う
自助・共助（互助）・公助のバランスがとれた
安心してらせるまち おおいそ

また、この地域福祉の理念を住民にわかりやすく伝えるため、本計画のキャッチフレーズを以下のように定めます。

①① おおきな海と空のもと
②② 一緒に
③③ 育て共に支え合う福祉のまち、大磯

大磯におけるつながりを作る地域の力

民の取り組み

- ▶ 大磯市
- ▶ 大磯コンソーシアム
- ▶ 東光院の多世代食堂、暮らしの保健室
- ▶ かたつむりの家
- ▶ 地域支援センターそしん
- ▶ 徳洲会湘南大磯病院

官の取り組み

- ▶ 大磯町「地域のつながり事業」
- ▶ 生涯学習情報一覧冊子「OISOまなびバンク」
- ▶ 大磯町民生委員・児童委員
- ▶ 大磯町西部地域包括支援センター
- ▶ 大磯町横溝千鶴子記念障害福祉センター「よこみぞまつり」

